

茅花流し

松岡隆子

ゆく春の遙かを何か烟らへり
人ごゑの遠くなりゆく茅花かな
緋躑躅の昼しんかんと街病めり
花水木とは何時となく昏るる花
水の香へ歩いて行けば夏に入る
白き花まことに白き立夏かな
十葉の花をあぐるは一斉に

牡丹の重たき雨となりにけり
牡丹の崩れてよりの無聊かな
だんだんに雨が重たしえごの花
会へぬ日を茅花流しの中にな
卯の花の水音昏れゆくまで歩く

今までの人生でこれほど毎日家にいることがあつただろうかと思う。折角の時間をただ忙しく過ごしている。一日中机に向かっているとエコノミー症候群になりそうで、時々庭に出て背伸びをする。小さい庭ながら油断しているとすぐ雑草が蔓延る。特に十葉には手こずる。目につくと抜くようにしているが、苔が膨らみ始めると抜けなくなる。(十葉の意志きつちりと花あげぬ 眸)。雨のなか庭中の十葉が咲き出した。小瓶に挿して家のあちこちに飾る。戩葉が十葉であると知ってから、その清楚な白さが好きになった。